

此のうちの越の日記は前章に示せる如く、元治元年五月彼れが北越へ旅行した時の日記で、初めに永機の銭の手紙が附いて居る。次ぎの「懐古帖」は彼の魚河岸の尾張屋に海老蔵の書いた法帖があつたのを彼れが見て其の裏へ自分の句を書添へたのであるが、開巻に「懐古」といふ彼の題辭があるから、其れによつて著者が假りに「懐古帖」と命じたのである。

越の日記

越路御旅行のよし真に面白くいつ頃御陪りにや御ものがたりたのしみ居り申べく候先は御はなむけさつと御ゆるし可給候あらしくめで度かしく

五月十七日

三升さま

永機

露水の味にも合ふや江戸饅頭

其角堂より饅頭くられし薬入りあり
同月廿一日 朝七つ時半江戸猿若町を出立
根岸の里にて 露はまた啼やまず五月空
日暮しの里にて 青田いま日暮しの里の朝日哉
十條宿にて休み 起立の立揚の朝や夏寒し
川口宿にて 土地の名によき光ある装哉
川口を過てしあすたといふ道に出て 蟬啼くやしあすた道の小荷駄馬
八つ半時頃岩槻宿泊りうなぎ昼飯に食したるは鳩ヶ谷といふ處毎月一六日岩槻市日なるよしにて賑はへり

岩槻にて

五月雨やくすいと織の宿の市

其よりはげしき風雨あり 松原や道降り崩す五月雨
同城下に出て 五月雨やれぐらにあきる旅からす

此日門弟巴二右衛門登食の時腰掛やうとて床几に刀の小尻打付けしに箱はずぐ
なるも中身切先曲りしはあまりのおかしさに爰に記す本人翌日より舌こきに道
ふと打興し居るを 生くちのまがりこゝろや瓜の皮

この宿にて親人に落合朝五つ前出立のよしにて是より菅蒲宿へ出る道ありわか
れ道にて弟新之助皆くに出あひ平蓮寺堂村といふ所へ出て此道菅蒲宿迄四里
半馬込村同じく平蓮寺村と同様の處にて菅蒲宿に着登食戸室村に休み此處に大
きな梅樹あるうんどんや本直し等を商ふ此家に「隨道」といふ二字道木の竿あり

青梅の味にまざるやかばり酒

平蓮寺村畑中にて不二始めて見る

不二を見て旅のよこれを覚えて

廿二日

此日より晴れて山見ゆる あの山もやがて越すなり時鳥

朝出立より初めて時鳥を聞きしなり晴れて暑さを覚えしまし

知らぬ人に言葉かけたり旅の汗

おしなべて是迄の道庚申塚多くおしへられた三島屋伊右衛門方へ泊る夕七つ半

時なりし

廿三日 蚊ばしらの中やほのかに角大脚

松原下總守御領地あり朝六つ半立ち始めて馬に乗り道にて馬士にはぐれ知らぬ
土地に迷ひ入り漸くの事に本道へ出て妻沼宿にて親人新之助國太郎に出合其よ
り小島の渡しへ出て尾島宿に懸る茲は新田公の御領地にて夫より世良田伊勢崎
駒井等を通り此宿にて浪士十四人程入口に會所やうの物を拵へ近在の物持へ餘
程の用金申付取立てたる由にて旅人宿殘らず断はられ夕暮火ともし過ぎて前橋
へ行くとして此土地も同様なる不承故猶きびしく宿一切なかるべしといはれ初旅
といひ殊更大嫌ひの浪士故只々恐怖のまゝ腹はへる足はしやつきり情けなきに
涙も流るゝばかり其夜駒形驛はずれに野島屋といふ怪し氣なる茶店ありしゆゑ
漸々の事にて落付是へ一泊せしものゝ夜具は素よりふとん一つなく香の物さへ
なき始末に野宿同様此日はあまりの事にて一句も浮ばず只恐れおのゝき跡にて
思へば面目もなしとばかりに 門あやめ長刀までも揃ひけり

廿四日 朝五つ前前橋へ来りぬれば前夜川越御城下より三百人の圍めの人数
来るよし今朝着るべしと入口より本町出口迄一町毎に番所出来嚴重の圍めに
て只々驚き其れよりまたく加道へ掛り途中船生の宿といふ不思議なる宿を見
八崎驛へ掛り又々親人新之助に出會まづぐ一と安堵の上其より白井横堀泊に

松屋治兵衛へ若鷄じて此邊小笠原甫三郎權支配所宿の若いもの仲間が援助もどきていたらく此家の亭主は江戸へ出て賣卜者致し居るよしにて其夜の中に掛合六日町まで駕二挺拵らへさせホツと夜に着き現に明し矢張一句も出ぬこそ道理としらるべし

廿五日 朝五つ過ぎ出立天氣よく中山峠へかかり始めて時鳥を聞き

是れからは十分に聴く田をさ説

數知れぬ庚申塚やほととぎす

底しれぬ谷間の水やほととぎす

向き合へば谷へそれけり時鳥

美

其より不動峠といふ坂あり絶景いはん方もなく中山を下りて塚原にて晝飯其より長井といふ村へ泊りと極り其道申が景といふ御開所あり頃しも暮合になり山道へたどりし名も知れざる山道なれば中々其嶮岨たとふるにもなく凡二里半程もありぬべし山上一里半も登りし折に最早日は暮れ果て霧深く心細さはいやまさりて只々神佛のみ祈りつゝたどりけるに漸く長井の驛に着して一統安心せしと思ひしに此驛は盜賊徘徊なして豪家と見れば用捨なく亂入のよしにて本陣宿泊を斷絶せしにぞ跡へも先へも行く事ならず只途方にくれたりしもやうく或る怪しき立場茶屋へすがり頼みて泊りを乞ひし所承知してくれ此時の嬉しさ

はいかばかりの事か國太郎も餘程運れて見えざれば心ならずと直ぐに迎ひのものを出せし所やうくにして逢ふたれば共に安心して一泊せしものゝ其むさき事何となく臭氣甚しく便所と云へば蕪だれの猿小屋とも言つべく此家にして珍味なりしは山の芋のとろゝ不思議なりとて

いもの味もうなぎなりけり時鳥

これより三國峠へかゝる

廿六日 朝五つ時立供人残りず乗馬にて其れより別當にて休み權現堂前にて休む此處の榜示杭に東上野境四越後魚沼郡三國峠道御代宜東小笠原甫三郎支配所四石神彦五郎支配所とあり首尾よく三國峠を下り淺貝の驛にて晝飯又々不居峠此處までの間谷合道二里あり道にさゝやかなる茶屋のありしにいこうてちまきを喰ふ此味云はん方なし 思ひきやちまきの征に水の味

美七

ふく石宿より牛に乗りふく石峠の登り半腹にて又々駕に乗り下山三叉の驛本陣池田屋七右衛門方にて泊り龜藏常盤津連中残りず茲に出會江戸出しの狀茲にて認居りし際葬式の通りしを見るに餘ほど品かばりてひなの有様何となく物淋し廿七日 朝六ツ半時立芝原峠を越し其より湯澤といふ驛に下り關の驛にて晝飯茲にて役者残りず顯れて今はかくすも詮なかるべしとて皆々焼け半分役者て候と現はに通り湯澤の驛も首尾よし六日町住吉屋源右衛門方にて一泊捕たての

船にて夜食其より網打を見物なし川添の整澤山飛びかふさま見事なりし歸宿して見れば男のこぜと女のこぜ二人にてうたひさめくさま口けす考らず其おかしきやかましき所の風こそ面白き事と語り合其夜下り船を掛合はして臥す
廿八日 五時より乗船小出と申す宿にて船中へ魚酒菓子をひさぐ女子ども乗り込みいまだ見れども淀のくらはんかの佛あり其よりお茶屋にて昼飯を爲す凡て此川水極早瀬丹波川筑殿川杯最合船中絶景なり岸の土手水際に一間又は二間四角の穴を明け此口より田へ水を引くよし水充分入りたる上は小石を此穴へふさぐといふ八つ半時ころ長岡へ着道のり二十八里あるよし直に仕立船にて七つ半頃より出立船にて歸寮

吳六

廿九日 明五つ前に三献亭に若直さま主人誠一氏に會ふ其より新潟表より皆〱迎ひ來り入浴朝飯を仕まひ駕にて三人は古町二の町平野屋勝次郎方へ行く其より同町池上へ行き昼食跡配りの扇面を認む

日のかげになびく青田や露の思
月の果腹にきらめく網びきかな
夕景より三献亭主人の招にて料理茶屋へ行き暮れてより池田やへ行き白仙三國屋高崎屋に會ひ其夜歸りて船の疲れに一睡夢やぶられて早日高く昇りぬるに驚きぬ

晦日 此日は目さめて直ぐに迎ひをうけ一統池田屋に集ひ稽古初めとなれり
朔日 此日も惣波と成つて歸宿

二日 初日となり人氣よく興行中別に記すべき事もなく狂言によせて其時々口吟し分は

御所さくらにて 舞殿もやつつけ機や鬼窟

白石齋宮城野にて 撫子のよこれ咲なる曇かな

松右衛門にて 漕きよせる漁舟や松落葉

明智にて 花びらはまだ咲たらず夏栴檀

源五兵衛にて 夕沙やぶつ／＼切の沖餘

關の戸にて 此雪をどうして來たぞ氷室寺

道風にて 居ぬ乳母の事おもひ出す夏香散

伊左衛門の匂を夏季に取なして 蚊遣火や紙子の音に明やすき

また新潟に居てよめる

白山晴嵐 神垣に目立つ仕丁や青あらし

寄居暮露 露と見る鳥居の露の青田散

古町夜雨 からかさ軒の雫や春のあめ

淡路帆 雲井から淡へゆきの荷舟かな

吳六

寺町晩鐘

暮てゆく夕や寺町の鐘おぼる

瀨夕照

年の瀬の波にきらめく夕日哉

辨天落馬

やがて来るかりの便りや朝煙

松原新月

松風の通ひはじめて夕つき夜

新鴻の街に七十四橋あり

辨慶が来たら迷はん夏の月

飛ぶ螢やみの数ある柳かな

八千八筋の川あり

此湊八千八筋ほととぎす

新鴻を出立して

時鳥毘沙門島を過ぎにけり

三條の配り扇

川魚に露の匂ひや夏の月

七里崎の人に扇望まれて

夕立のあした見えけり出雲崎

廿六日 新鴻を出立朝五つ時松田屋を出立京辨屋より送る人仁三那伊之助兩

人付要吉嶋の宿にて歸るを登り峠にて 符笠に山のかさなる暑さ哉

廿七日 馬下より朝五つ前出立馬下川にて渡守をそく大にひまどり其よりは

會津の關所あり是よりまんどろ峠越えたり

陸はつゞら折なる山あり見おるせば矢よりも早き流れ川石を碎きて落す有様月

景宜しく只ノ、苦しき事は炎天に身を焦し椀の飯も蠅の炎に妨げられこれ餓鬼

道にも似たり漸に清水を求めて咽を潤し 萎るゝや鬼も十八八重

麓に津川上川の名おかしく其の波橋向に關所あり其夜津川宿へ泊る鮎取立にて
夕食

津川にて川鹿をとひしに此ほとりにては川鈴鹿といふよし

草伏せを川鹿たづねて新陣

廿八日 朝六つ半出立茲にておいちとの二人の送人に別る其より焼山越並も

難處なり高居峠峠峠たばね松峠峠峠の難處なり其より天といへる宿に泊る茲

は蕎麥の名物なるよしにて食す 蚊ばしらやそばうちあげて夜の聲

新鴻を出立して焼山越にて初めて時鳥を聞く

もう江戸は勝魚も来るや閑子とり

廿九日 天の宿五つ前出立其より五里半川原道過ぎて若松會津城下殊の外大

町なり此處大清水にて登食其より瀧坂峠並も絶景なり原といふ宿にて泊り越後

屋文太郎方へ宿す 日ぐらしに道いそがるゝ峠哉

七月一日 朝六つ前出立黒森峠其外名もしれぬ峠三つ四つ程あり上小家の宿

にて泊夕七つ時頃より小雨ふる 山を出るきりやいつしか秋の雨

二日 上小家より皆々別々出立六つ頃七藏大吉龜吉佐吉を連れ白河千歳屋に

て休み登食茲にて短冊三ひら扇四本を書き歩行にて白坂迄参り堺村より明神の

森通り茲に名物さした飯あり關東の明神ありしかば參拜此先に關東路奥州路境

の大樹ありあし野丸屋にて晝飯馬五疋仕立させ廻廻迄来る茲にて休み太田原まで行き泊る朝少し雨五つ時頃より晴る

白河にて 朝晴れの樹々の葉や秋の蟬

奈須の野の原を通りて見れば只渺茫たる原なりいつの頃よりかしらず茲に小林出来たり 鳥ひとつ通はぬ原の殘暑哉

堺林よりあしの道にて七藏馬より落ちるテレかくしに馬を叱るも何の感じもなし余ほどの滑稽なりし其より太田原の原道まで半道の中程にて七藏大吉馬をのり替て先の馬の馴れざるを口小言ながら乗つて歩み出でしが又々七藏は逆様に落る案外乗人の掛なかりし故と同行の物笑となれり其より介抱などして大吉なるもの馬に乗りかけ前鞍へ手をかけしに腹帯切れてこれもあなのけに落ちる何たる滑稽なるか大吉息とまりし上蒼ざめしまゝ是をかくす暇もなく馬方に見出されての面白さ

三日 太田原印南屋より五つ前に出立五つ雨やみ奈須野を通りて

色紙の空を散りけり天の川

其れより佐久山喜連川氏家阿久津土屋泊茲にて天狗組の様子を聞く大騒ぎといふ此あたり天狗組騒動にて民心安からずと聞きそこ／＼に通る

四日 五つ前馬にて皆々出立白澤宇都宮に達す此處に御關所あり新潟表の芝

居番付を出し各名を願はして首尾よく通る宇都宮かどやにて晝飯

鈴虫やのしる枕の宇都の宮

其れより芋がら新田雀の宮石橋小金井泊

五日 五つ時前出立小山此處も同じく天狗組の騒ぎにて固め殿しく家毎に大筒拔身の鎗にて見張りしかば各々名前を願はしそこ／＼にて通る茲も一人一條にて關所あり 虎の尾踏すゝきをわける秋野哉
其れより栗橋の番所中田にて留められ仙臺屋にて一泊

とめられてやがて咲なり秋の菊

大津にて 秋の蚊や寐られぬ夜を明けの鐘

七日 晝より出立大津にて泊る

八日 江戸入 稻の香や茲から後は江戸なまり

懷古帖

浅みどりながき日かけをくりそめて柳にけふる今朝の春風

さま／＼な夢の初荷や賣ふれ

七くさや異國言葉の出たるぞ

福壽草廣野の癖はなかりけり
露の中へつん出す年の頭かな
我まゝはなき青柳の風情かな
柳ふくかぜに力はなかりけり
梅咲くや洗粉くさき朝の風呂
春雨やうす曇そめのすみ田川
春も漸く露の中から山わらふ
草の質の草にもどるや春の雨

助六の初役に 花に酔此鉢巻の不釣合

暫 紅隈の土人形や霜口和

勤進帳 篠掛にめぐみの露をちから哉

花のころかぜは南か朝かへり
櫻から下戸も下戸も温りけり
十如是の明暮にあるさくら哉
花散やうつ向て見れば七多羅樹
時鳥啼くやれんじのうす月夜
日の中は聲渡けりほととぎす

夏ぎくの霜を見に行く紙燭哉
むぎの穂につゆある朝や時鳥
濡紙のふみはまだ見ず初松魚
常磐樹の落葉や撞かぬ鐘の餅
世のちりを洗ふ佛の湯浴かな
寐るまでの外に念なし竹婦人

吉備大臣劇 征蠻の蜘蛛の振舞まなぶともたどりやはてむ唐歌のみち

夕榮や紅まゆげの技のはな
夕だちや暗間を眠だつ鷺一羽
菖にしのゝめはこふ牡丹かな
田舎家は馳走にむせる蚊遣哉
飛鳥紅かひに行くをんなかな
紫陽花ははなびら毎の化粧哉
紫陽花や夕への雨の朝ほらけ
夜あらしの濁りに染ず蓮の花
魂棚へ来て人らしや秋のてふ
人の世や外から見えぬ柿の漉

市川園十郎

風少しほしき夜もがな飛ぶ螢
武帝不用遠摩遠摩不参武帝呼々去廣洋芳
極樂にさとの地獄は無ものぞ

百人一首に題して

天智天皇御製 秋の田やおもひもよらぬ稲の月

持統天皇 衣ほすいほり静かや卯花かき

柿本人麿 山鳥のしたり尾長し三日の月

山邊赤人 田子浦に出見ん不二と初日出

猿丸大夫 しか啼や紅葉ちりしく山の道
中納言家持 夜も更るとおほゆる月に霜の照り

安倍仲磨 もろこしの月思れて三かさ山

喜撰法師 世を宇治の茶にして暮す庵哉

小野小町 花のいろは移にけりな酒の酔

蝉丸 是やこの行くも歸るもやま櫻

参議 箕 和田の原漕出てあまの小鯉釣

僧正遍照 天津風くものはこびや雨の足

陽成院 筑波根の茶より落る雪解かな

欠

MISSING

四行法師

猿の子のかこち顔なる時雨哉

寂蓮法師

楓の葉に露立のぼる秋のくれ

皇嘉門院別當

芦の葉に身を盡してや蜘蛛の舟

式子内親王

夜櫻に忍ふることもありし哉

殷富門院大輔

沙干狩ぬれにそ濡し袖たにも

後京極攝政前太政大臣

蛩啼や霜夜の遠きぬた

二條院殿岐

沖の石人こそしらね鳴鳩詩し

鎌倉右大臣

なぎさこゝ蟹の小舟や春の風

参議雅經

さよ更けて衣うつなり郷の秋

前大僧正慈圓

おほけなくうき世の民や稻の出来

入道前太政大臣

花誘ふ嵐の庭の吹煙かな

權中納言定家

鷹啼くやまつほの浦の夕煙

正三位家隆

夏も漸く夕風さそふみそき哉

後鳥羽院

あちきなき世をば免れて鉢叩

順徳院

古へのかなる軒端や桐のはな

市川代々の發句狂歌におのれがされ歌をしるせし七代めが鵜飼の鳥のあとへ已
が筆の耻かしきなも

奈真坂やこの手紙のうらおもて兎にも角にもねちね筆にて

右 市川九世 團十郎 敬白

市川團十郎 終

現代の人を現代の筆によりて傳ふ、幾多の
誤謬、幾多の疎漏は他日再版の日を期して
之を改訂すべし、然れば讀者が此の書を繰
きて心付き給ひし事は何にても著者あて
に注意もしくは報道あらんを望む、名宛は

東京市赤坂區表二丁目十七番地
伊原實々園

有 所 覆 版



明治卅五年十二月廿三日印刷
明治卅五年十二月廿六日發行

市川團十郎與付

定價金九拾錢

著 作 者 伊 原 敏 郎

發 行 者 天 方 貞 造
東京市京橋區卅間堀一丁目三番地

印 刷 者 吉 見 繁 藏
東京市京橋區四船屋町廿六七番地

印 刷 所 英 舍
株式會社 秀 英 舍
東京市京橋區四船屋町廿六七番地

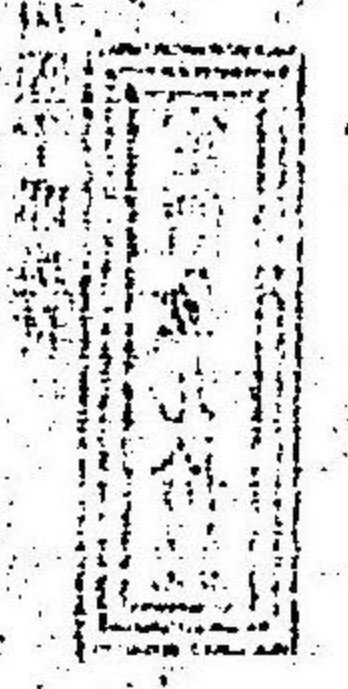
發 兌 元 東京市京橋區竹川町廿番地(東仲通)
エツクス倶楽部



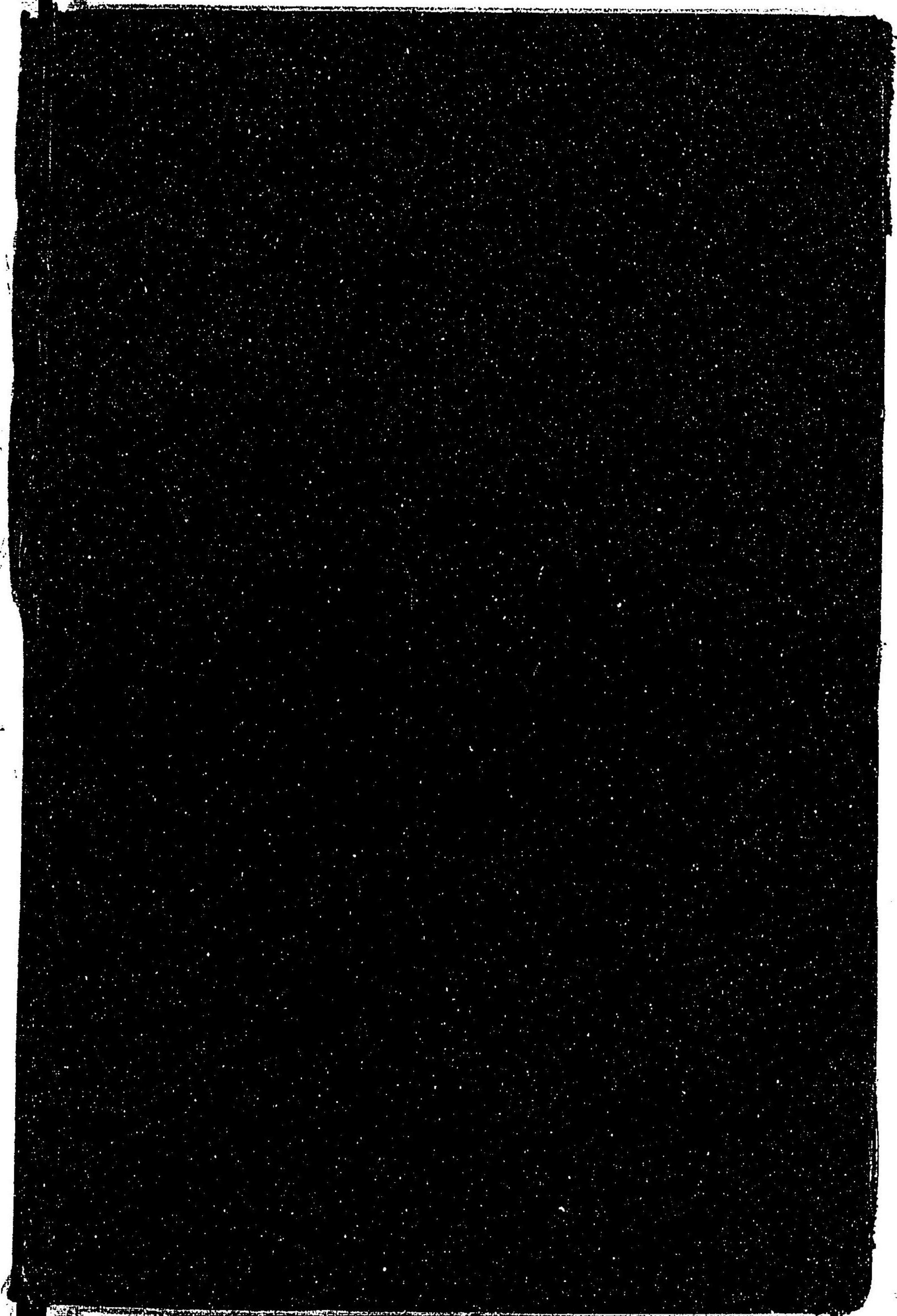
民國二十二年六月五日
總務處

國立中央圖書館

圖書館
總務處
編譯部
採訪部
閱覽部
特藏部
印刷部
庶務部
會計部
倉庫部
庶務科
會計科
倉庫科



376
302



074747-000-3

86-302

市川團十郎

伊原 青々園/著

M35

CEK-0003

